



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療か在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

オリンピックのテレビ観戦で僕が一番好きなシーンは、選手がメダルを取った瞬間よりも、選手のお母さん、お父さんの感無量の表情かもしれない。我が子を世界一にするために、どれほどの生活と、親子の時間を犠牲にしてきたのだろう。今すぐ、我が子を強く抱きしめたいことだろうと想像して、もらい泣き。
そんな自慢の我が子が、もしも先に逝ってしまったら……この人の訃報に、胸が詰まりました。1992年のバルセロナ五輪で金、96年のアトランタ五輪で銀メダルに輝いた柔道家の古賀稔彦さんが、3月24日に神奈川県内の自宅で亡くなりました。享年53。死因は「がん」との発表ですが、どこのがんであったかは明かされていません。報道によれば昨年3月に、がんのため腎臓を片方摘出。その後、夏

199 柔道家 古賀稔彦



にも手術を受けていたとのこと。親しい仲間には、「俺、がんになっちゃったよ」と明るく手術跡を見せたりもしていたようです。故郷・佐賀で暮らす母親の愛子さんには闘病を一切秘密にしていました。突然の息子の訃報を受けて、愛子さんは「心配させまいと隠していたでしょう。気遣いを忘れない立派な息子だった」と

テレビの取材に気丈に答えていました。翌日、このニュースを見た知人女性から僕に相談がありました。「私の夫は末期がんなのですが、古賀さんと同じように、実家の親には絶対に言つなと頑ななのです。でも、夫が亡くなった時、なぜ黙っていたのか、どうして会わせてくれなかったのかと責められるのは辛い。秘密にしておくのは、本当に親孝行ですか?」と。僕は「がんばって、秘密を守ってください」とお答えしました。夫の意思と、義理の両親の気持ちに板挟みになる奥さんは、さぞかしお辛いことでしょう。

母親には闘病を知らせず

親より子が先に逝ってしまう逆縁の看取りは、大変辛いものがあります。「代わってやりたい」とたいていの親御さんは働きます。もしも「どうしても最期に会わせてあげたい」と思っているら、あと数日……となったところで報せることは、許されると思いません。真実を知らせるか否かで悩むのは、優しい家族である証拠です。

古賀さんは、中学1年の時に佐賀の親元を離れ上京されました。だからこそ「心配をかけたくない」という気持ちが一層あったのかも。誰より強かった平成の三四郎は、誰より優しい息子でしたね。

平成の三四郎は優しい息子